

Logical English Reading の活用について

埼玉県立浦和高等学校 岡田 稔 先生

1. はじめに

現任校では、授業中にミニ英語ディベートを取り入れたり、部活動で英語ディベートの指導に関わったりしていますが、実は学生時代に英語ディベートを経験したことは一度もありません。むしろ、音楽に没頭する日々を過ごしておりました。そのような私が英語教員となり、英語ディベートに出会うことになりました。埼玉県では、2000年初頭から英語アカデミックディベートの全県的な大会が始まり、私も携わることとなりました。それまでは、ルールなども知らなかった私も、多くの先生方にご指導いただきながら、少しずつ自分でもディベートに取り組むようになりました。

ディベートの良さはなんと言っても、1つのテーマに対して多角的に向き合い、興味や関心を深めることができる点にあります。例えば、「宿題廃止」「制服廃止」といった学校での身近な問題から、「安楽死の是非」「原発廃止」「死刑廃止」など、教科書では扱いにくい社会問題まで広く扱えます。こういった問題を賛成・反対それぞれの立場から徹底的に考えることにより、自分自身の価値観や知識が問われるだけでなく、これまで見えていなかった側面にも気づかされます。

このようなプロセスを通じて、ただ「なんとなく」知っていた社会問題に、自分なりの視点を持つことができるようになりました。一度ディベートで取り上げたテーマは、後にニュースや新聞で再び目にしたときに、「あのときの話題だ」とすぐに気づくことができ、その背景や論点が自然と頭に浮かび、内容もよく理解できるようになりました。日常の中でも、ディベートで扱った話題が自然と耳に入ってくるようになり、そうした経験をするようになっていきます。

こうして、埼玉の先生方や全国で知り合った先生方のご指導のもと、自分自身もディベートに取り組む中で、「なんとか授業の中でもディベートを取り入れられないだろうか」と強く思うようになりました。しかし、実際に授業で実践しようとする、適切な論題の選定や意見ポイント出し、議論の組み立て方など、授業案を一から作ることは私にとって非常にハードルの高いものでした。英語部の活動でも、手探りながら英語ディベート練習を進めてはいましたが、英語を話すだけでも難しい中で、さらにその上にアイデアを出し、議論を構築するという作業は、少人数で行う部活動だからこそ可能であり、40人規模の教室で行うにはやはり難しいのではないかと感じていました。

2. Logical English Reading について

そうやって模索している中、2020年度大学入試に英語4技能試験が導入される学年を持つことになりました。1年生の段階から、英検のインタビューテストのような簡単な会話からディベート的な議論へと発展させられないかと考え、ALTの先生ともさまざまな試みを行いました。しかし、賛成・反対の意見をうまく対立させて交差させるような展開には至らず、「なんとなくディベートのようなことをやった気がする」といった程度の活動にとどまってしまいました。それでも、このようなスピーキング活動といったアウトプットの機会は、生徒の英語に対するインプットの質を高める効果があることを強く実感しました。

次に受け持った学年では、4技能のテストが実施されない環境であっても、スピーキング活動はぜひ継続して行いたいと考えていました。それは、アウトプットの経験が確実にリーディングやリスニングの力の向上につながると感じていたからです。

1年生のときは、教科書で読んだ話題のリテリングの機会を持ち、スピーキングテストも行っていました。2年次は、幸運にも Logical English Reading を紹介していただき、適切な論題の選定、賛成・反対の両サイドからのリーディング課題と確認問題、また、columnなども掲載されており、馴染みのない話題でも読み応え十分なものでした。本校では第2学年の英語コミュニケーションの授業でALTの授業

が設定されています。この授業のための副教材として使用することを決めました。

3. 具体的な授業について

1つの話題に3時間かけるよう設計しました。

1 時間目

① Warm Up (15分～20分)

日本語で本日の話題についてブレンストーミングする。わからないことがあればネットなどで調べてもよいとする。各グループで出された意見は、なるべく英語にして、代表者が黒板に書く。わからない場合はALTに助けてもらう。

② ALT チェック (5分～10分)

黒板に書かれた英語を添削してもらい、あるいはもっと自然な表現に直してもらう。発音練習を行う。ALTが話題を広げられる場合は、広げてもらう。生徒から質問があれば受けてもらう。

③ 賛成側意見リーディング (10分～12分)

本文を読み、問題に解答する。その後、答え合わせ。その際に、追加説明があれば、JTE、ALTから英語あるいは日本語で行う。

④ サマリーライティング (8分～15分)

黒板に書かれたクラスメートの意見や、自分が読んだ英文などの内容を参考にしながら、自分にとって「じっくりくる意見」を見つけ、その意見をもとに、AREA（主張・説明・例示・結論）の型に沿って要約する。要約したものは回収し、ALTが、ABCの評価を付けて次の授業で返却する。

2 時間目

前回のサマリーを返却後、A評価をもらった者数人に自分のサマリーを読み上げてもらう。それ以後は、1時間目の③～④の手順通りに反対側の意見を読む。

3 時間目 ミニ・ディベートのような活動（ジャッジなし）＋パラグラフ・ライティング

①それぞれ賛成反対のサマリーを生徒が持っている。JTEが、奇数列を「賛成側」、偶数列を「反対側」などと指名して、お互いにサマリーを読み合う。お互いに読み終わったら、賛成側の列が一つ前の席に移動して入れ替えをし、お互いに読み合うが、3回目からは、サマリーを見ずに言えるようにする。その際は、文を暗記するよりは、意見に沿って言えばよいとする。(12分)

②賛成反対を入れ替え、①と同様に行う (12分)

③ALTに反論の仕方を教えてもらう。賛成側・反対側の生徒を指名してそれぞれALTに向かって自分の意見を述べてもらう。ALTはYou said … but that is not true. I think…のパターンを使って、生徒の意見に反論してもらう。(3分)

④反論練習 (10分) ALTの例に沿って反論練習する。(実際には、どれくらい反論できていたかまでは検証しきれていませんが、なんとか、相手に言い返すくらいはできていたと思います。)



⑤パラグラフ・ライティング（13分） 賛成でも反対でも自分の立場で AREA（主張・説明・例示・結論）の型に沿って 60～80 語程度のライティングを行う。その際、主張は 1 つのみとし、AREA で構成され、特に結論の英文は主張と同じにならないよう工夫させる。

定期テストでは、練習した話題を 2～3 つ提示して、自分の意見を書かせることをした。（10 点）ALT をお願いして採点をしてもらった。

まとめ

今回、Logical English Reading3 を選んだ理由は、まず、その内容に非常に共感したからです。例えば、今でこそ当たり前のように語られる「使い捨てプラスチックの禁止」や「SNS」の問題に加えて、生徒の中には「アフーマティブ・アクション」や「ベーシックインカム」といった言葉を知らない生徒もあり、そうしたテーマを扱うことが、ちょうどよい学びの機会となりました。特に最後に扱った「安楽死」のテーマについては、「生きる権利があるなら、死ぬ権利もあるのか？」といった問いを通して、生徒たちも真剣に考えるきっかけになりました。授業で扱うには際どいテーマではありますが、ディベートの中でこうした話題を扱えたことは、とても意義深かったと感じています。

とは言え、実際にディベートまで発展しなかったとしても、Logical English Reading シリーズは、1 つのテーマについて賛成・反対の立場からアカデミックに論じられた英文が掲載されており、十分に読み応えのあるテキストだと言えます。

実際の授業では「ミニ・ディベート」として実施したため、ジャッジを立てるわけでもなく、本格的な反論の応酬には至りませんでした。それでも多様で広いテーマに取り組めたことは、その後の生徒たちのパラグラフ・ライティングにも大いに活かされたと思います。

というのも、現在の大学入試においては、特に難関大学を中心に、マークシート式ではなく自由英作文のような記述式問題が重視される傾向にあります。残念ながら 2020 年にはスピーキングテストの導入は実現しませんでした。それでも「自分の考えを英語で書く力」はスピーキングの土台であり、アカデミックな英語力を育てる上で極めて重要であると考えています。また、英語のインプットの質を高めるためにも、このスキルは欠かせません。

また、教員側にとっては、生徒のエッセイを一つひとつ添削する作業は確かに大変ですが、ALT の先生の協力を得たり、現在では少しずつ生成 AI を活用した添削にも取り組んでおり、作業の効率化や指導の質の向上を目指しています。

そうした意味でも、今回のディベートからエッセイ・ライティングへとつなげる一連の流れは、生徒の英語運用能力の向上に役立ち、最終的に大学入試の場面でも生徒たちにとって大きな力となったのではないかと感じています。

プロフィール

岡田 稔 先生（埼玉県立浦和高等学校）

埼玉県立浦和高等学校に 2017 年着任。前任校の県立川越高等学校の 14 年間の経験をもとに指導を工夫しています。本年度、1 年生を受け持つことになり、スピーキングからライティングへとつなげる活動の模索をしています。

